

愛知学院大学 第242回モーニングセミナー

邪馬臺国と日本書記

—古代国家をどうとらえるか—

名古屋市立大学 名誉教授・特任教授
吉田一彦



2026年5月12日（火）

目次

- I 『日本書紀』に記述される『魏志倭人伝』の位置
- II 『日本書紀』はどのような書物か
- III 二つの古代国家論——古墳時代か飛鳥奈良時代か
- IV 古代国家をどうとらえるか——纏向遺跡の都市国家段階から
ワカタケル大王の領域国家へ
- まとめ

『日本書紀』 卷九 神功皇后39年・40年・43年条

- ① 神功皇后摂政三十九年条に「三十九年。是年也、大歳己未。〈魏志云、明帝景初三年六月、倭女王遣大夫難斗米等、詣郡求詣天子朝献。太守鄧夏遣使将送詣京都也〉」。
- ② 同四十年条に「四十年。〈魏志云、正始元年、遣建忠校尉梯携等奉詔書印綬。詣倭国也〉」。
- ③ 同四十三年条に「四十三年。〈魏志云、正始四年、倭王復遣使大夫伊声者掖耶約等八人上献〉」。

※ 三者は連続記事。

同 読み下し文

- ① 魏志に云く「明帝景初三年(239)六月、倭の女王、大夫難斗米^(なんとまい)等を遣し、郡に詣^(いた)りて天子に詣り、朝献せむことを求む。太守鄧夏、吏を遣して将て送り、京都に詣^(いた)らしむ」と。
- ② 魏志に云く「正始元年(240)に、建忠校尉梯携^(ていけい)等を遣し、詔書・印綬を奉りて、倭国に詣^(いた)らしむ」と。
- ③ 魏志に云く「正始四年に、倭王、復^(また)使の大夫伊声者^(いせいしゃ)・掖耶約^(やややく)等八人を遣して上献す」と。

二つの理解

- ・ 本文ではなく、注(本注:日本書紀の当初から存在)に記される。
 - ・ 「倭女王」「倭王」「倭国」の語は記載されるが、「卑弥呼」「邪馬臺国」の語は記載されない。
 - ・ 部分的に文字を変更:「明帝」挿入。「二年」を「三年」。人名表記の一部改変。
- ①『日本書紀』は神功皇后を卑弥呼に擬している[小島1994など]。
 - ②『日本書紀』は「魏志倭人伝」を熟知・検討しているが、邪馬臺国・卑弥呼には冷淡で、自分たちの政権に連続する王権とは見なしていない[村井2013など]。
- ☆ 私見は②。

『日本書紀』の基本情報

- 『続日本紀』の養老四年(720)五月癸酉〈21日〉条。
是より先、一品舍人親王、勅を奉りて日本紀を修めり。是に至りて功成りて奏し上れり。紀州巻、系図一卷。
- 天武十年(681)三月条に国史編纂開始の記事あり。『日本書紀』天武十年三月丙戌〈17日〉条。
天皇、大極殿に御して、川島皇子、忍壁皇子、広瀬王、竹田王、桑田王、三野王、大錦下上毛野君三千、小錦中忌部連首、小錦下安曇連稻敷、難波連大形、大山上中臣連大島、大山下平群臣子首に詔して帝紀と上古諸事を記定めしめむ。大島・子首、親ら筆を執りて録せり。

どのような書物か

- 全三十巻のうち巻一、巻二は神話。天地開闢からイザナギ・イザナミの話。アマテラスの話。ニギノミコト（アマテラスの孫）が地上に降臨する話（天孫降臨）などが記される。
- 巻三から巻三十は歴史。天皇ごとに記述。神武天皇から持統天皇に至る代々の天皇の即位のこととその系譜、そして各天皇の事績が記され、天皇自身の性格や文化的特色などにも言及がなされ、四十代におよぶ天皇の歴史が叙述される。持統十一年（697）まで。
- 江戸時代以来の『日本書紀』研究の歩み：（ア）出典論、（イ）紀年論、（ウ）区分論。

区分論の研究の進展

- 全三十巻を次の三つに区分。それぞれ編述者が異なり、執筆年代が異なる〔森博達1999、2011、瀬間正之2024〕。
 - ①α群（巻十四～巻二十一、巻二十四～巻二十七）。暦が元嘉暦：七世紀末まで使用。
 - ②β群（巻一～巻十三、巻二十二～巻二十三〈改変〉、巻二十八～巻二十九）。暦が儀鳳暦：文武二年(698年)から使用。
 - ③巻三十。
- β群は巻五（崇神紀）から書き始めた〔瀬間正之2024〕。さらに編纂の最終段階で巻二十二・二十三が改変され、巻一～巻四が書かれたか。

α群とβ群 執筆の順序・時期

- **α群は雄略天皇から。『日本書紀』は巻十四から書きはじめられた【森博達1999】。**
- **雄略の時代から今の世が始まるとする理解は、七世紀末期～奈良時代の政府の歴史認識を示すもの【岸俊男1988】。**
- **β群は文武朝になってから、その上に書き足された。**

『日本書紀』の思想

- 『日本書紀』(720年)は、日本の天皇制度の成立に対応して、その思想・理念を説明するための書物として書かれた。
- 万世一系／天孫降臨／天皇は神の子孫（現人神）
- これらは政治理念であり、政治思想として主張された。
- 全30巻のうち、前半2/3ほどは歴史的事実を伝える記述(記録に基づく記述)ではなく創作。神話も伝承ではなく創作
[吉田2016]。
- では実際には日本の古代史はどのようなものだったのか。

古代国家をめぐる二つの学説

- 考古学者——古墳時代に日本の古代国家が成立した〔下垣2025など〕。
- 文献学者——7世紀中後期の「律令国家」の成立をもって古代国家の成立とする〔仁藤2025など〕。
- 私見：僕は文献研究の歴史学者だが、古墳時代に日本の古代国家が成立したとする見解に賛成している。
- 都市国家から領域国家へ。
- 7世紀末の〈天皇制度〉の成立は古代国家の第二段階の開始、あるいは中世の開始。

纏向 〈まきむく〉 遺跡（奈良県桜井市） 国の史跡

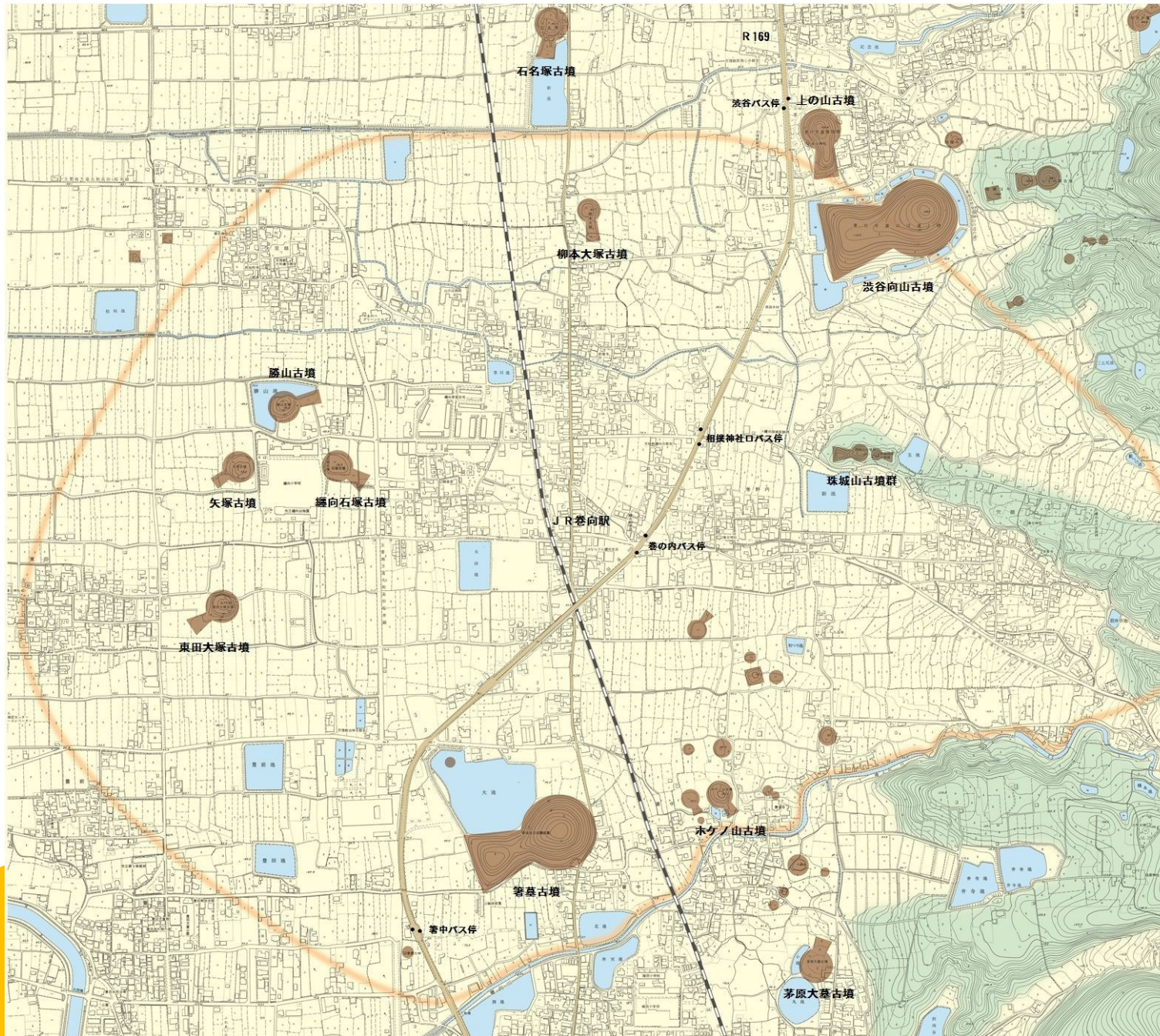
- 三輪山と纏向山に挟まれた扇状地の〈都市〉〈政治的な都市〉の遺跡〔寺澤1999、石野2005〕。私見は〈都市国家〉。
- 3世紀初め頃の成立。最初期の政治権力の中心地の一つ。
- 纏向大溝と呼ばれる運河の跡が検出された。
- 出土した土器には他地域から搬入されたものの割合が高い。

東西交易の中心地

- 前方後円墳の発祥地
 - 木ケノ山古墳（全長約80m、3世紀中期力）
 - 箸墓古墳（全長約280m、3世紀後期～4世紀前期力）

纏向遺跡

- 奈良県桜井市
- JR桜井線の巻向駅周辺
- 前方後円墳あり。
- 纏向大溝は、幅約5m、深さ約1.2m、北構約60m、南溝約140m
- 地図は桜井市纏向学研究センターHPより

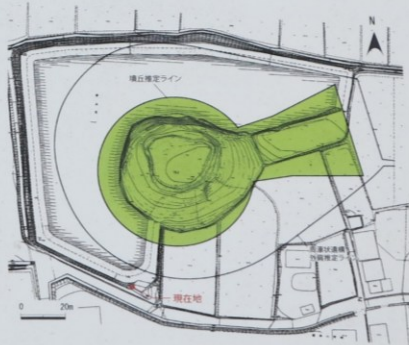




勝山古墳(墳丘墓)

Katsuyama burial mound

3世紀代に築造されたと考えられる大型墳墓で、前方後円形の墳丘は全長約115mを測ります。纏向石塚古墳と同様に、定型化した前方後円墳が出現する以前に築造された可能性が考えられています。埋葬施設の内容は不明ですが、墳丘の周囲をめぐる周濠状の遺構からは土器や木製品が多数出土しており、なかには建築部材やU字形木製品など特異なものも含まれていました。これらの遺物は、古墳出現期における墳墓祭祀を知る上で貴重な資料となっています。



桜井市教育委員会



勝山古墳

筆者撮影2018.8.21.



纏向大溝

纏向遺跡で発見された大溝。板で護岸工事をしている。(写真／奈良県立橿原考古学 研究所)

箸墓古墳(箸中山古墳) 前方後円墳 全長276m

写真は桜井市纏向学研究センターHPより



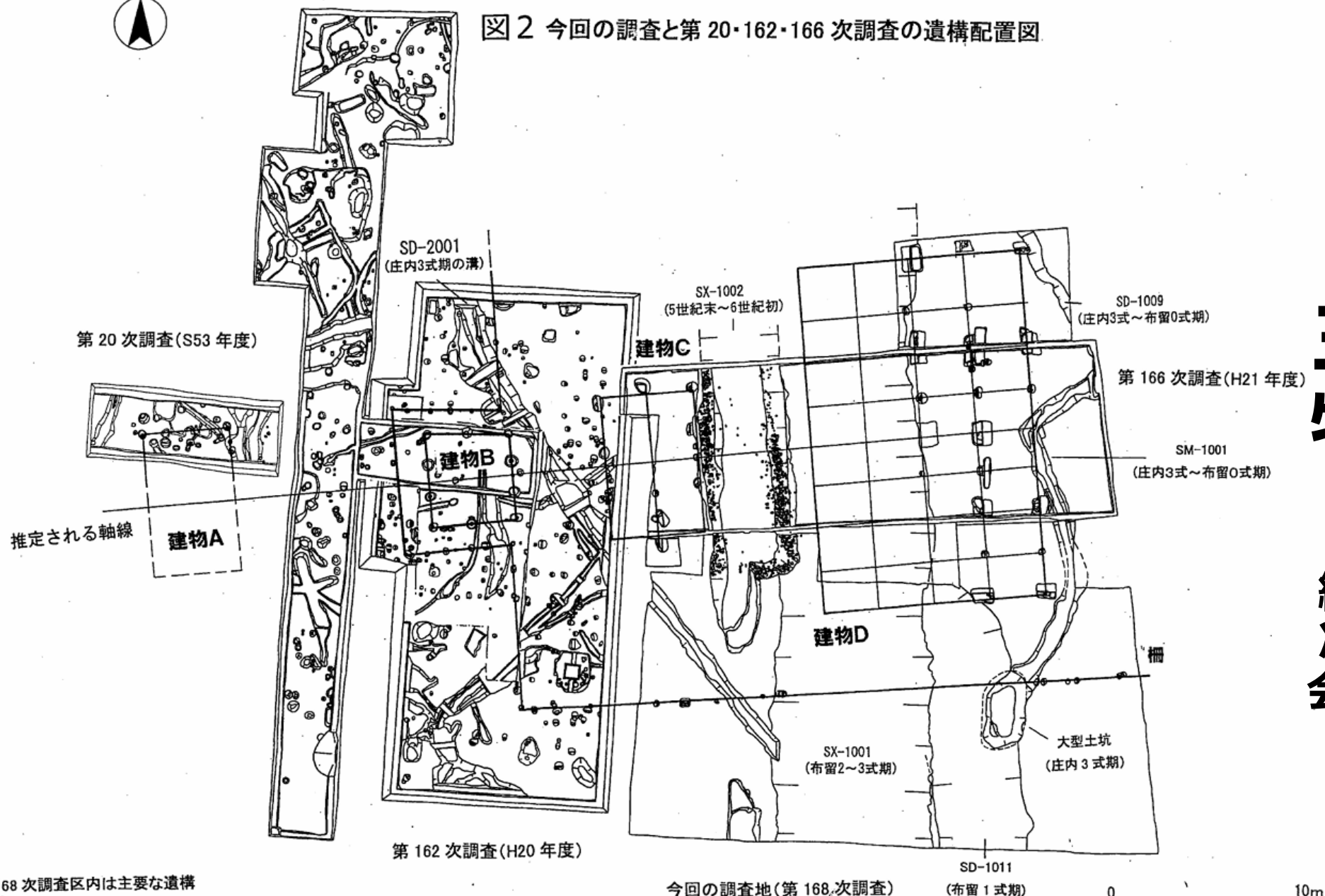
- 奈良県桜井市箸中山。
- 3世紀後期～4世紀前期か。
- 宮内庁は倭迹迹日百襲姫命(やまとととひももそひめのみこと)の大市陵と治定・管理。
- 『日本書紀』崇神天皇十年九月条に三輪山説話(箸墓説話)が記される。
- 卑弥呼の墓と推定する見解がある。
- しかしその積極的証拠はまだなく、時代もあわず、倭人伝の卑弥呼の墓の記述とも合致しない。

宮殿跡、神殿跡かと推定される遺構

- 纏向遺跡の辻地区から3つの建物跡。東西線上に並ぶ。
- もっとも東よりの大型建物跡。掘建柱建築の総柱構造で、高床建物。王の宮殿跡かと推定。
- その西隣のもの(三棟の中央のもの)は棟持柱(むなもちばしら)を持つ建物。掘建柱建物。伊勢神宮正殿と類似する構造を持つ。黒田龍二氏は神殿跡と推定した。
- 黒田龍二氏による推定復元案（CG）あり。



図2 今回の調査と第20・162・166次調査の遺構配置図



辻地区

三棟の建物を検出

纏向遺跡第166
次調査現地説明
会資料(桜井市教
育委員会)より

※ 166・168次調査区内は主要な遺構のみを表示しています。

CGによる建物の推定復元図

黒田龍二氏による

黒田氏は三
棟の中央の
建物を神殿
跡と推定

写真は現地解説板
より





現在はこのように遺跡を整備

筆者撮影2018.8.21.

ワカタケル大王／ヲホド大王

- ・ワカタケル大王。5世紀後期。日本における領域国家の成立。
『宋書倭国伝』の「武」、『日本書紀』の雄略天皇。
- ・埼玉県行田市の稲荷山古墳。熊本県の江田船山古墳。
- ・武人(武士)の政権。馬を使用か。また渡来人(渡来民、移民)を編成か。
- ・ヲホド大王。6世紀前期。福井・滋賀から大阪へ。新しい血筋の大王・王家であろう。領域国家のpart2。
- ・今城塚古墳（大阪府高槻市）がその墓。

『日本書紀』天皇表

	代	漢風諡号		国風諡号
	1	神武	ジンム	カムヤマトイハレヒコ
	2	綏靖	スイセイ	カムヌナカハミミ
	3	安寧	アンネイ	シキツヒコタマテミ
	4	懿德	イトク	オホヤマトヒコスキトモ
	5	孝昭	コウショウ	ミマツヒコカエシネ
※	6	孝安	コウアン	ヤマトタラシヒコクニオシヒト
	7	孝靈	コウレイ	オホヤマトネコヒコフトニ
	8	孝元	コウゲン	オホヤマトネコヒコクニクル
	9	開化	カイカ	ワカヤマトネコヒコオホヒヒ
	10	崇神	スジン	ミマキイリビコイニエ
※	11	垂仁	スイニン	イクメイリビコイサチ
	12	景行	ケイコウ	オホタラシヒコオシロワケ
	13	成務	セイム	ワカタラシヒコ
	14	仲哀	チュウアイ	タラシナカツヒコ
	15	応神	オウジン	ホムタ
※	16	仁德	ニントク	オホサザキ
	17	履中	リチュウ	イザホワケ
	18	反正	ハンゼイ	ミツハワケ
	19	允恭	インギョウ	ヲアサヅマワクゴノスクネ
	20	安康	アンコウ	アナホ

	代	漢風諡号		国風諡号
※	21	雄略	ユウリャク	オホハツセノワカタケル
	22	清寧	セイネイ	シラカノタケヒロクニオシワカヤマトネコ
	23	顕宗	ケンゾウ	ヲケ
	24	仁賢	ニンケン	オケ
	25	武烈	ブレツ	ヲハツセノワカサザキ
※	26	継体	ケイタイ	ヲホド
※	27	安閑	アンカン	ヒロクニオシタケカナヒ
	28	宣化	センカ	タケヲヒロクニオシタテ
※	29	欽明	キンメイ	アメクニオシハラキヒロニハ
※	30	敏達	ビタツ	ヌナクラノフトタマシキ
※	31	用明	ヨウメイ	タチバナノトヨヒ
※	32	崇峻	スシュン	ハツセベ
※	33	推古	スイコ	トヨミケカシキヤヒメ
※	34	舒明	ジョメイ	オキナガタラシヒヒロヌカ
※	35	皇極	コウギョク	アメトヨタカライカシヒタラシヒメ
※	36	孝德	コウトク	アメヨロヅトヨヒ
※	37	斉明	サイメイ	(アメトヨタカライカシヒタラシヒメ)
※	38	天智	テンチ	アメミコトヒラカスワケ
※	39	天武	テンム	アマノヌナハラオキノマヒト
※	40	持統	ジトウ	オホヤマトネコアメノヒロノヒメ

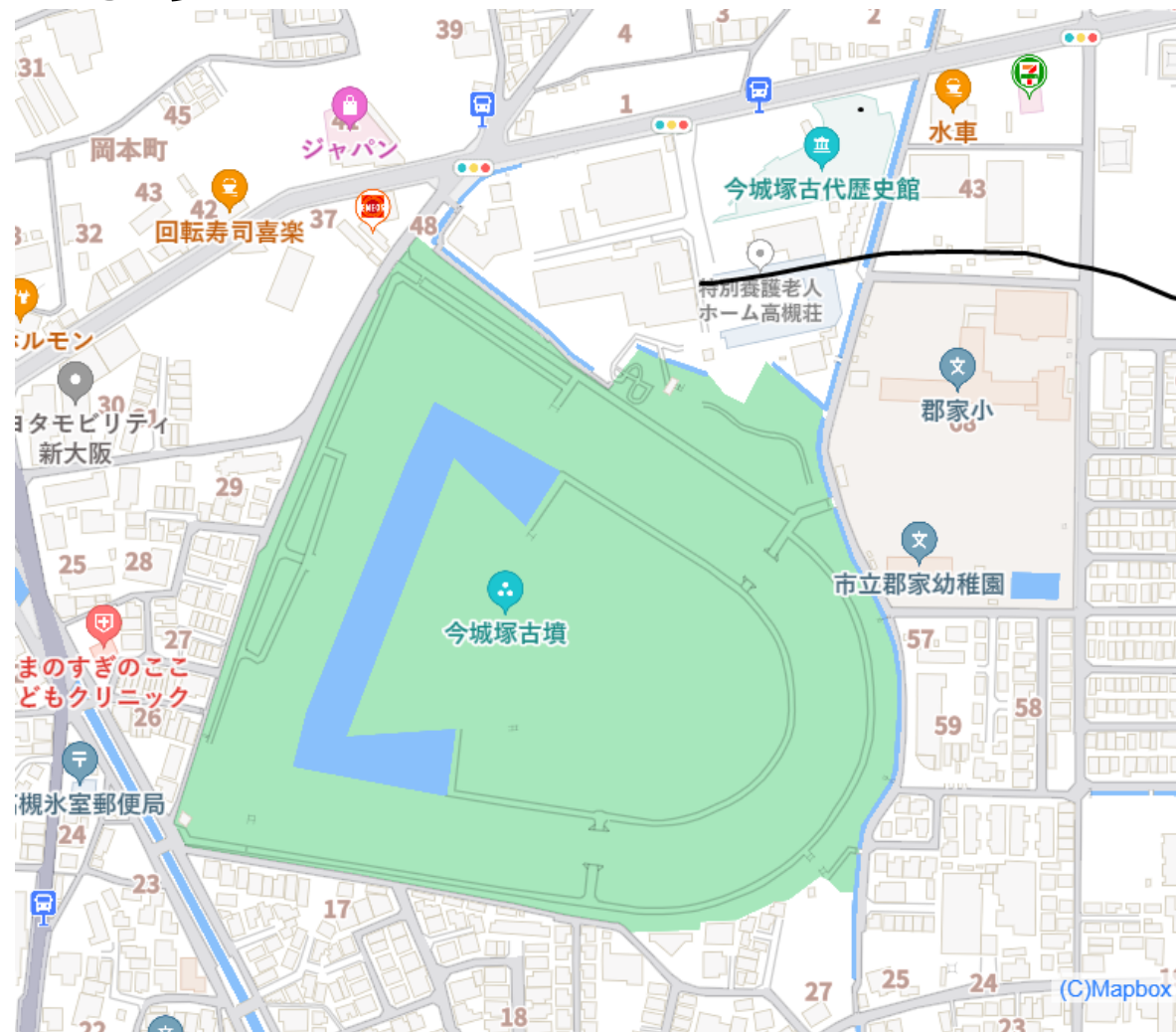
※は三王朝交替説において実在とされている天皇。但し允恭と雄略の間に木梨輕皇子を入れ、雄略の後に飯豊皇女の即位を認める。

福岡猛志氏作成。梅村喬・神野清一編『改訂 日本古代史新講』梓出版社、2004年、より

今城塚(いましろづか)古墳

大阪府高槻市郡家新町

6世紀前期。墳丘181m。内濠、外濠の二重の濠あり。全長340m。
図は高槻市HPより



埴輪

円筒、馬、白鳥、武人、力士、巫女、樂人、太鼓、家型、
千木・鯉木付の家形など、189体の埴輪レプリカが再現的に列立。
筆者撮影2024.5.9.



世界史の中の日本列島の歴史

- 〈都市国家〉から〈領域国家〉へ。
- 武人(武士)の政権。馬の導入、渡来民(移民)の役割大。
- 『日本書紀』の記述に関わらず、事実としては皇統は万世一系ではない。神の子孫ではない。王家には血筋の交替あり。
- 「邪馬臺国」と後代の国家は非連続。
- 七世紀末期に新しい政治制度としての〈天皇制度〉が成立。通説は天武・持統朝(天武or持統)。私見は持統朝に成立。
- 戦国の時代から平和の時代へ。その画期は672年壬申の乱。
- 697年文武天皇の即位の頃から〈天皇制度〉が確立。

参考文献

- ・ 小島憲之他校注・訳『日本書紀』 1、小学館、1994年
- ・ 村井康彦『出雲と大和』 岩波新書、2013年
- ・ 吉田一彦『『日本書紀』の呪縛』 集英社新書、2016年
- ・ 森博達『日本書紀の謎を解く』 中公新書、1999年
- ・ 同 『日本書紀の成立の真実』 中央公論新社、2011年
- ・ 瀬間正之『上代漢字文化の受容と変容』 花鳥社、2024年
- ・ 岸俊男「画期としての雄略朝」 『日本古代文物の研究』 塙書房、1988年

- ・ 寺沢薫『日本の歴史02 王権誕生』講談社、1999年
- ・ 同 『卑弥呼とヤマト王権』中公選書、2023年
- ・ 石野博信編『大和・纏向遺跡』学生社、2005年
- ・ 黒田龍二『纏向から伊勢・出雲へ』学生社、2012年
- ・ 桜井市立埋蔵文化財センター編『「纏向」その後』図録、2015年
- ・ 西谷正『魏志倭人伝の考古学』学生社、2009年
- ・ 半沢英一『邪馬台国の数学と歴史学』ビレッジプレス、2011年
- ・ 加藤謙吉『渡来氏族の謎』祥伝社新書、2017年
- ・ 今城塚古代歴史館編『常設展示図録』2012年
- ・ 下垣仁志「古墳と国家形成」『歴史評論』897、2025年
- ・ 仁藤敦史「卑弥呼王権の国家段階」『歴史評論』897、2025年
- ・ 吉田一彦「古代国家論の展望」『歴史評論』693、2008年